

しばらくの間、またおつきあいを願います。先月号に大阪の話を書きました。予想通り何の反響もありません。あつたら困ってしまいますので、丁度ええかなと思っております。さて、今回また大阪ネタを。今回は「上方落語」について書いてみます。

「上方落語」という名称は1932年に発行された雑誌で初めて使われたんやそうです。歴史的には京都も大阪も古く、1703年に亡くなりました「初代露の五郎兵衛」が京都の社寺仏閣の境内で「軽口」「辻噺」と呼ばれる語りをやっていたんやそうです。その後ぐらいに大阪の生玉神社の境内などで「初代米澤彦八」という人が小屋を張って演じてはあったらしいんです。今でも京都の北野天満宮には「露の五郎兵衛」の碑文が立ち、また生玉さんにも「米澤彦八」の碑文を上方落語教会が立てはります。しかし流石は京都、千年の歴史を持つ都だけに、今の噺家のような人が17世紀の初めにいたはったんです。浄土宗西山深草派総本山「誓願寺」の第55代法主「安楽庵策伝上人」と呼ばれる偉いお坊さんです。この上人は時には難しくなりすぎるお説教を、ちょっとした笑いを含め、親しくそして分かりやすく人々に行なわはったそうです。それらの話を8巻の本にまとめ「醒睡笑」と名付けられたそうです。今でもこの京都の新京極にある誓願寺さんには、お稽古事の上達を願って扇子を奉納するための「扇塚」があり、京都の芸子さんや俳優さん、勿論噺家さんたちもお参りしてはるそうです。「醒睡笑」の中には風刺、教訓、啓蒙的な要素を上手に書き込んであって、庵策伝上人こそが落語の始祖やと言われてます。そんな長い歴史を持つ「上方落語」も存亡の危機があったんです。昭和20年代、上方のお笑いは漫才が主役でした。戦前からいてる大看板のベテラン噺家と入門まなしの若い噺家全部で、20人ほどしかおらんようになってしもうたんです。特に二代目桂春團治が亡くなったときには、マスコミが「上方落語はこれで滅びた」と報道したんやそうです。そんな周りの雰囲気を見て、若かりし桂米朝さん、三代目桂春團治さん、亡くなった六代目笑福亭松鶴さん、五代目桂文枝さんなどが奔走し、若手勉強会などを開き、また古老から古い噺を教えてもらい、それを書き伝えたりしてネタを記録していかはりました。そして今では協会員だけでも200人を超えているそうです。師匠の口演を見て入門した人や、大学などのサークル活動から入門した人など、色々な噺家さんが毎日どこかで落語会を開いてはります。

さて、「上方落語」と「江戸落語」には色々な違いがあります。まず言葉。「上方落語」では上方言葉を使います。そやから近畿圏以外の方には言葉を会得するのに苦労されてはるそうです。演目は昔から交流があったようで、名前を代えて話されている落語もあります。例えば江戸での「酢豆腐」は上方では「ちりとてちん」となっていたり、上方の「鴻池の犬」が江戸では「大どこの犬」となっていたりしてます。噺の内容は少し違うようですが、大筋は同じようなものとなっております。また上方落語には「旅ネタ」と呼ばれる噺がたんとあります。このネタは「東の旅」「西の旅」「南の旅」「北の旅」と4つに分かれていて、その中にも数種類のネタがあります。そして冥土の旅に「地獄八景亡者戯」、海の旅に「小倉船」、天空の旅に「月宮殿星の都」、そして異国の旅に「島巡り」という話もあります。反対に江戸にあつて上方にないネタは「人情噺」です。内容は講談に近く、サゲがありません。上方には広い意味での人情噺はありますが、全てサゲがあるんで、性格には人情噺と呼ばれへんそうです。それから、江戸と上方の違いは、江戸落語は「噺家をお座敷に呼んできて、じっくり噺を聴く」ことが基本となり発展していったのですが、上方落語はすでに書いたように、人ごみの中で大きな音や滑稽なしぐさをしながら噺を聞かせて発展してきたというところなんです。ですから上方落語には欠かせない道具があります。もちろん、扇子や手拭は不可欠ですけど、江戸にはなかった小道具があります。まず「見台」と呼ばれる木製の小さな机。それに向かって噺家が座ります。机に見立てたり、床に見立てたり、演目によっては大きな釜に見立てたりして使います。見台の前には「膝隠し」と呼ばれる小さな木製の衝立。大きな動きで着物の裾がはだける見苦しさを防ぎます。また見台の上には「小拍子」と呼ばれる小さな拍子木。鳴らすときは左手に持ち見台を叩きます。その音で雰囲気を変えたりします。そして「張り扇」と呼ばれる扇を皮などで包み、見台をパンパン叩く道具もあります。昔、神社の境内で見台を小拍子や張り扇をカチャカチャ、パンパン鳴らしながら大声で見物人を集めたんでしょな。出囃子は今では江戸落語でも使われていますが、昭和初期まで上方でしか使われてなかったんやそうです。このお囃子を弾いているのが「下座さん」と呼ばれる人たちです。太棹の三味線奏者と笛、太鼓などの鳴り物を奏者で成り立ってます。三味線は専門の方が弾いてくれはります。時には長唄などの唄も歌うことがあります。鳴り物奏者は基本的に若手の噺家さんが勤めます。また口演中にお囃子を演出として盛り込んで使うのも上方の特徴の一つです。賑やかなお囃子だけやうて、寂しい雰囲気や恐ろしい雰囲気を作り出すのも下座さんのお仕事です。

さあ、皆さんも日本に帰国の折には、この投稿を読んでから生の落語を聴きに行ってください。面白い話は幼稚園児でも笑えませ。